

書物で見る日本と西洋 —多面的にみることによる面白さ—

諸角由利佳

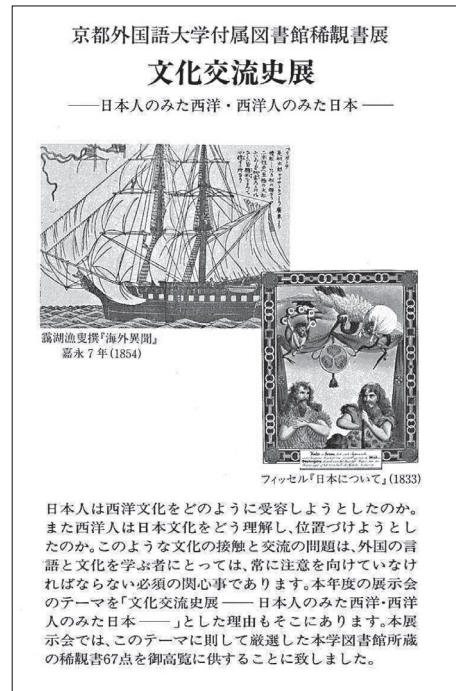


皆さんは、「西洋人と日本人の互いのイメージ」について考えたことがありますか？外国語大学に所属する人ならば、そういったことを考える機会に恵まれていることでしょう。実際に身をもって体感してきた人も少なくはないかも知れませんね。留学生の方は実際に日本に来てみてどのように感じましたか？

これだけの情報社会となった今でも、人によってイメージやそれに伴う捉え方、感じ方は多岐にわたると思います。それでは、今ほど日本が海外に知られていなかった頃はどのように思われていたのでしょうか。

そのヒントは1996年に行われた展示会「文化交流史展 —日本人のみた西洋・西洋人のみた日本—」にあります。この展示会は、当時の日本語教育学会大会の主催者である佐治圭三日本語学科学科主任教授よりの開催要請を受けて行われた展示会で、ニッポナリアと我が国の対外交渉史の両コレクションや世界の古地図コレクションより厳選された稀観書や古地図が展示されました。その中で展示された杉田玄白訳『解体新書』などは、誰もが知っている有名な書物のひとつではないでしょうか。これらを含む書物の中には、まだ海を越える人がそういなかった時代における、日本と西洋、両国の互いのイメージが記されています。それらはよくご存じでと評したくなる内容もあれば、事実とは異なる内容も様々に記載されており、なかなか面白いです。実際にそう感じるのには私だけではないようで、展示された書物『海外異聞』でもその差異について述べられています。

ところで図書館には実は様々な展示物があることに、皆さん気付いて下さっていますか？これら



「図書館稀観書展案内葉書コレクション」より

は図書館員が一生懸命考え、随時更新し、その都度心を込めて展示しています。今回ご紹介した「案内絵ハガキから見た貴重書展示会のイメージ」もその中の1つです。こちらは、図書館本館の入館ゲートを通して左手、検索コーナーに展示されています。恐らくお目当ての本を探すべく検索コーナーに向かい、ヒットしたならばすぐに探しに行くのが普通でしょう。でも、お時間がある時には、その検索コーナーでも少し立ち止まってください。展示会の歴史、そしてその先にある世界の歴史に触れることができますよ。

もろずみ ゆりか (2014年度英米語学科卒業生)